

学位論文要約

非外傷性イベントと解離性体験に関する臨床心理学的研究

広島大学大学院教育学研究科

教育人間科学専攻

池田 龍也

## 目 次

### 第 1 章 本研究の背景と目的

- 第 1 節 解離に関する研究の動向
- 第 2 節 出来事と解離を繋ぐ個人要因
- 第 3 節 解離を引き起こす出来事要因
- 第 4 節 本研究の目的

### 第 2 章 外傷性/非外傷性イベントと解離の関連の再考

- 第 1 節 出来事と解離の関連性の再考 (研究 1-1)
- 第 2 節 解離を引き起こす出来事の再考 (研究 1-2)

### 第 3 章 出来事と解離を繋ぐ要因としての個人要因

- 第 1 節 被受容感が解離に及ぼす影響 (研究 2)
- 第 2 節 被害的認知が解離に及ぼす影響 (研究 3)

### 第 4 章 解離を引き起こす出来事要因と解離体験者の心的世界の特徴

- 第 1 節 出来事の属性が解離に及ぼす影響 (研究 4)
- 第 2 節 解離体験者の心的世界の特徴に関する探索的検討 (研究 5)

### 第 5 章 総合考察

- 第 1 節 本研究の成果
- 第 2 節 本研究の限界および今後の課題

### 引用文献

## 第 1 章 本研究の背景と目的

### 第 1 節 解離に関する研究の動向

解離とは「精神が記憶や意識やアイデンティティ等を統合する能力が一時的に失われた状態」(岡野, 2002) であり, 解離を中核とした精神疾患を解離性障害と呼ぶ。解離は解離性障害のような病的な解離から, 比較的健康的な解離までの連続体が仮定され, これを解離連続体仮説と呼ぶ。解離連続体仮説に立脚した解離性体験尺度 (Bernstein, & Putnam, 1986; Carlson, & Putnam, 1993) は解離の頻度を測定するものであり, 国内外において臨床群から一般群まで幅広く適用されている。

解離研究は現代に至るまで, 尺度開発, 関連要因, 解離性障害 (特に解離性同一症/解離性同一性障害 (Dissociative Identity Disorder; 以下 DID)) の形成プロセスが検討されてきた。解離は Janet (1889 松本訳 2013) によって発見された当時から外傷体験が原因であると考えられ (Putnam, 1989), このような因果関係の想定を外傷モデルと呼ぶ (Nemiah, 1998; Ross et al., 2008; Spiegel, 1984)。

外傷体験となるような出来事は精神疾患の診断・統計マニュアル第 5 版 (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野・染矢・神庭・尾崎・三村・村井 (訳) 2014; Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: DSM-5; 以下 DSM-5) において, 命や身体の保全に迫る脅威に曝される, または他者が曝されているのを目撃することであると定義される。しかし外傷体験あるいはトラウマという術語は日常用語化しつつあり, その示す範囲が拡大している。そこで以降本研究では, 命や身体の保全に迫る脅威のことを外傷性と呼び, 外傷性が伴うネガティブなライフイベントを外傷性イベント, 外傷性の乏しいネガティブなライフイベントを非外傷性イベントと呼ぶ。

先行研究の多くが外傷モデルを支持し、外傷モデルは解離研究の中心に位置付けられる。例えば Ross et al. (2008) はアジアと西欧において外傷性イベントと解離性障害の関連を検討し、いずれの文化圏においても外傷モデルが妥当であると結論付けた。他にも Nilsson, & Svedin (2006) の実証研究や、Dalenberg et al. (2012) のメタ分析も外傷モデルを支持している。これらの先行研究に従えば、外傷性イベントと解離の関連性に議論の余地はないように見える。

しかし、Dalenberg et al. (2012) のメタ分析は対象者 50 名以上 (以下  $N \geq 50$ ) の研究を対象とし、対象者 50 名未満 (以下  $N < 50$ ) の研究は除外している。彼らは  $N \geq 50$  の研究に限定した理由を、 $N < 50$  の研究をメタ分析に含めると異質性が高くなり一般化が困難になるためであると述べている。しかしメタ分析では、効果量を統合する過程で効果量に対して対象者数に応じた重み付けを行い、この重み付けられた効果量を用いて分析を実施する。従って、敢えて対象者数の少ない研究を除外する必要はなく、対象者数によって採否を判断することは、対象研究の選定基準について妥当性を欠くと考えられる。そのため彼らが除外した  $N < 50$  の研究も含めた分析を実施し、知見を更新する必要がある。

また、外傷モデルについても疑問が残る。なぜなら外傷性イベントに曝露されても高い解離傾向を示さないこともあり (Briere, 2006)、非外傷性イベントが原因となった DID 事例を報告している DID 事例のレビューも存在するためである (一丸, 1998; 舛田・中村, 2007)。岡野 (2007a, b) によれば、解離を引き起こす出来事は外傷性イベントに限定されず、van der Kolk, McFarlane, & Weisaeth (1996 西澤監訳 2001) も外傷性イベントと解離に単純な対応関係を想定すべきではない、と慎重な姿勢を取っている。以上を踏まえると、現在解離研究の中心に位置づけられている

外傷モデルには、一定の限界があると考えられる。

外傷モデルにおいて、解離は圧倒的かつ侵襲的な外傷性イベントに対する防衛として理解される。つまり解離には、自分に起こったことだと受け入れられない、あるいは受け入れたくない強烈な出来事から当事者を保護するという機能的側面があるといえる。しかし、受け入れられない強烈な出来事は外傷性イベントに限ったものではない。外傷モデルにおいても他の要因を一切考慮する必要がないと明言されているわけではないものの、解離の原因を外傷性イベントに求め、他の要因について十分に検討されていないのが現状である。岡野 (2007a, b) も指摘しているように、解離を論じるためには外傷性のような出来事の属性 (出来事要因) に加え、当事者の物事の捉え方 (個人要因) も考慮すべきである。

## 第 2 節 出来事と解離を繋ぐ個人要因

岡野 (2007b) は「関係性のストレス」概念を展開する中で、関係性のストレスはきわめて主観的なものであることが少なくないとし、当事者の主観にも注目する必要を主張した。例えば同じ出来事であったとしても体験する者が違えば、出来事から受ける影響が異なると考えられる。そのため解離を検討するためには個人要因も考慮する必要がある。

周囲からは些細な出来事のように見えても、当事者は深く傷付き苦しむことがある。このような出来事に対する脆弱性に関して、奥山 (2005) は愛着に着目し、愛着の形成が不完全であると「易トラウマ性」を持つこと、つまり非外傷性イベントであっても外傷性イベントのような出来事として体験されることを示唆している。この点について Sandberg (2010) は、成人期における愛着が外傷性イベントと外傷後ストレス反応 (Post-Traumatic Stress Response; 以下 PTSD) の調整変数になり、不安定な愛着を持つ者はそうでない者よりも PTSD を示しやすいことを明らか

にした。以上を踏まえると、個人の持つ対人関係の安定性は出来事から受ける影響の深刻さに影響すると考えられる。

杉山 (2002) は「自分を支えてくれる他者の存在を感じ、自分は他者から一定の理解や暖かさ、承認をもって大切に扱われ、支えられているという認識と情緒」を「被受容感」と呼び、被受容感が抑うつを低減することを示している。上述の Sandberg (2010) の知見も合わせると、被受容感の乏しさが解離と関連することが予想されるものの、その関連性は未だ明らかとなっていない。

本間 (2013) は空想内容に焦点を当てて、高解離傾向者はそうでない者よりも、断片的な情報からネガティブなイメージを鮮明に空想しやすいことを示している。この知見は解離を原因と想定するものであり、本研究で想定する影響の方向性とは逆である。しかし、非外傷性イベントによって引き起こされる PTSD の背景に認知的要因が存在する可能性 (伊藤・鈴木, 2009) を踏まえると、解離の生起には出来事に対するネガティブな認知が作用している可能性がある。つまり客観的には些細な出来事であったとしても、当事者が出来事を被害的に捉え、結果として解離のような重篤なストレス反応を示すと考えられる。

### 第3節 解離を引き起こす出来事要因

岡野 (2007a) は解離を引き起こすストレスの1つとして「関係性のストレス」を想定し、対人関係に由来する慢性的なストレスが解離を引き起こす可能性を指摘した。同時に岡野 (2007b) は関係性のストレスは必ずしも外傷性を帯びるものではないと述べ、非外傷性イベントによっても解離が生じることを示唆している。更に Brunner, Parzer, Schuld, & Resch (2000) は幼少期の虐待を統制すると、ある辛い出来事が繰り返されるという出来事の継続性が解離と関連し得ることを示した。これらの

知見を踏まえると，非外傷性イベントであったとしても，出来事が継続性を帯びるものであれば解離が生じ得ると予想される。

#### 第4節 本研究の目的

以上の議論を踏まえると，先行研究の主な問題点は，大多数の研究が外傷モデルに依拠し，非外傷性イベントの影響および個人要因が十分に考慮されていない点にある。外傷モデルに基づく解離の理解は，非外傷性イベントによって解離が引き起こされる可能性が捨象される危険を孕む。そして心理臨床実践においては，解離の原因を積極的に外傷性イベントに求めることで，当事者の持つ個人要因を見落とし，偽りの記憶の形成を促す可能性がある。

そこで本研究では，外傷モデルでは説明が困難な非外傷性イベントによって引き起こされる解離の関連要因を，出来事要因と個人要因の側面から明らかにすることを目的とする (Figure 1)。その準備段階として，解離の原因を積極的に出来事へ求めるべきか否かをめぐって，出来事と解離の関連の程度を明らかにする (研究 1)。次いで，出来事と解離を繋ぐ個人要因 (研究 2, 3, 5) と，解離を引き起こす出来事要因 (研究 4, 5)

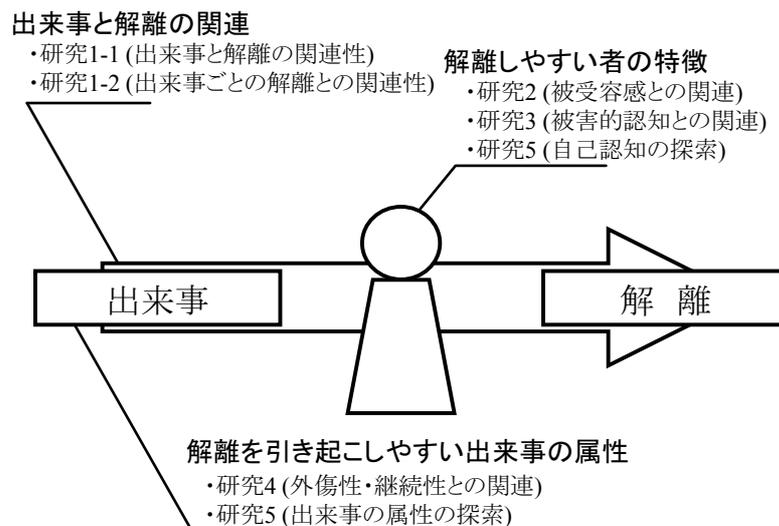


Figure 1 本研究の検討モデル

を検討する。

## 第 2 章 外傷性/非外傷性イベントと解離の関連の再考

### 第 1 節 出来事と解離の関連性の再考 (研究 1-1)

1. 目的 Dalenberg et al. (2012) で対象外となった  $N < 50$  の研究を含め新たにデータベース検索を実施し、出来事と解離の関連を再検討する。

2. 方法 (1) 文献検索 Dalenberg et al. (2012) の文献 34 編に加え、オンラインのデータベース検索による文献抽出を行った。(2) データベース PsycINFO, PsycARTICLE, MEDLINE を用いた。(3) 検索条件 タイトルに dissociation と trauma が含まれる査読付き論文。(4) 検索対象期間 1986 年～2013 年 12 月。(5) 検索結果 208 編 (Dalenberg et al. (2012) との重複を除く)。(6) 抽出条件と抽出結果 上記文献のうち、(a) 精神医学あるいは臨床心理学用語としての解離現象について言及し、(b) 本文が英語で記述され、(c) 研究論文であるもの。以上 3 つの条件に合致したものを抽出したところ、160 編の文献が抽出された。(7) 対象文献の選定と選定結果 出来事と解離の 2 変数について、(a) Pearson の積率相関係数を算出している、または (b)  $r$  を算出可能な統計量が掲載されているものを機械的に選定し、対象とした。その結果、54 編が対象文献となった。(8) 相関係数の抽出 Dalenberg et al. (2012) の手法に従い、対象文献に記載された相関係数が抽出され、54 編の文献より、171 件の効果量が抽出された。

3. 結果と考察 Dalenberg et al. (2012) の用いた 34 編の文献と合算し、計 229 件の効果量が用いられた。 $N < 50$  の新たに追加された文献は 14 編、Dalenberg et al. (2012) 以前に公刊された  $N \geq 50$  の文献は 33 編抽出された。先行研究で未収集であった文献が追加されたことで、メタ分析の示す結果の妥当性が向上したと考えられる。統合結果は  $r = .29$  であり、同

時に高い異質性が確認された ( $I^2=82.49\%$ )。異質性の高さと同様に統合された効果量の大きさは、Dalenberg et al. (2012) とほぼ同様であった。このことから、 $N<50$  の文献を除外しなくとも異質性の高さに大きな影響はないことが推察された。異質性の高さから、出来事と解離の関連は一般化が困難であることが示唆された。

## 第2節 解離を引き起こす出来事の再考 (研究 1-2)

1. 目的 解離と関連しやすい出来事と、その関連の程度を明らかにする。
2. 方法 研究 1-1 に加え、各文献に“trauma”として記載された出来事を用いて層別化した。
3. 結果と考察 各文献に“trauma”として記載された出来事によって層別化し、下位集団分析を実施した (Table 1)。結果、これまで解離の原因と見做されてきた「性的虐待」や「幼少期の外傷体験」に中程度の異質性が認められた (各々  $r=.29, I^2=72\%$ ;  $r=.28, I^2=62\%$ )。得られた結果から、外傷性イベントは解離と関連しているものの、特定の出来事だけでは解離の生起を説明できないことが明らかとなった。従って、出来事と解離

Table 1  
出来事によって層別化した統合された相関係数

出来事	<i>r</i>	研究数	95% CI		<i>p</i>	<i>Q</i>	<i>df</i>	<i>p.h</i>	$I^2$
			下限	上限					
幼少期以降の外傷体験	.14	7	.01	.27	.04	8.31	6	.22	28%
身体的ネグレクト	.16	6	.01	.30	.04	14.94	5	.01	67%
情緒的ネグレクト	.19	7	.04	.33	.01	5.02	6	.54	0%
ネグレクト	.23	10	.11	.34	.00	42.44	9	.00	79%
辛い出来事の回数	.23	9	.11	.34	.00	10.10	8	.26	21%
身体的虐待	.27	35	.21	.33	.00	134.79	34	.00	75%
幼少期の外傷体験	.28	21	.20	.35	.00	52.70	20	.00	62%
性的虐待	.29	46	.24	.34	.00	161.60	45	.00	72%
幼少期以降の性被害	.31	5	.15	.45	.00	16.22	4	.00	75%
その他の外傷体験	.32	13	.23	.41	.00	43.65	12	.00	73%
情緒的虐待	.32	14	.23	.41	.00	97.57	13	.00	87%
外傷体験尺度合計得点	.33	42	.27	.38	.00	231.47	41	.00	82%
裏切りによるトラウマ	.39	2	.14	.59	.00	0.45	1	.50	0%
致死性体験	.62	3	.45	.74	.00	59.38	2	.00	97%

注) *p.h* は *Q* 検定の *p* 値を示す。

を関連させる要因や、解離を促進する要因を明らかにする必要がある。

### 第3章 出来事と解離を繋ぐ要因としての個人要因

#### 第1節 被受容感が解離に及ぼす影響 (研究2)

1. 目的 被受容感の乏しさは解離のリスク要因であると考えられるが、その関連については不明である。そこで非外傷性イベント、被受容感および解離の関連を明らかにする。

2. 方法 (1) 対象者 大学生 172 名 (男性 68 名, 女性 104 名)。外傷性イベントに該当すると思われる出来事も報告されたが ( $n=1$ ), 該当者数が少ないため、以降の分析からは除外した。(2) 尺度 (a) 解離性体験尺度 (以下 RDES; 田辺, 1994)。Ray, June, Turaj, & Lundy (1992) を参考に 5 件法 (0.全くない~4.いつもある) で実施。全 28 項目。(b) 改訂版出来事インパクト尺度 (以下 IES-R; 飛鳥井, 1999)。全 22 項目 5 件法。教示は“過去のストレスを感じた出来事についてお尋ねします”とし、出来事の自由記述を求めた。(c) 被受容感・被拒絶感尺度 (杉山・坂本, 2006)。被受容感項目 8 項目を使用。5 件法。

3. 結果と考察 舛田・中村 (2007) を参考に、対象者は持続型ストレス群 ( $n=56$ ) と一時型ストレス群 ( $n=116$ ) に分類された。階層的

Table 2  
解離を目的変数とした階層的重回帰分析

	$\beta$		
	Step1	Step2	Step3
ストレス者の分類 (持続型=1)	-.06	-.05	-.05
IES-R	.59 ***	.58 ***	.57 ***
被受容感		-.16 *	-.16 *
ストレス者の分類×IES-R			-.03
ストレス者の分類×被受容感			.02
IES-R×被受容感			.01
ストレス者の分類×IES-R×被受容感			-.05
$R^2$	.34 ***	.36 ***	.35 ***
$\Delta R^2$		.02 *	-.01

注)  $R^2$  は自由度調整済み。\* $p < .05$ ; \*\*\* $p < .001$

重回帰分析にあたり，Step1 では出来事要因の主効果，Step2 では個人要因の主効果，Step3 では交互作用項が投入された（強制投入法）。分析の結果，被受容感と解離には弱い関連が認められ（ $\beta=-.16$ ），有意な交互作用は認められなかった（Table 2）。以上より，被受容感の乏しさは解離のリスク要因となる可能性がある。

## 第2節 被害的認知と出来事の外傷性が解離に及ぼす影響（研究3）

1. 目的 本間（2013）や伊藤・鈴木（2009）の知見から，ネガティブな認知は解離と関連すると推察されるが，解離に及ぼす影響は明らかとなっていない。そこで，被害的認知が解離に及ぼす影響を検討する。

2. 方法 (1) 対象者 大学生207名（男性43名，女性164名）。(2) 尺度 (a) RDES。(b) 外傷性の有無。伊藤・鈴木（2009）を参考に，致死性・大怪我・身体保全の3項目。(c) 日本語版パラノイア・チェックリスト（以下，JPC；山内・須藤・丹野，2007）。全18項目。被害的な観念の頻度・確信度・苦痛度について測定。5件法。

3. 結果と考察 対象者は尺度（b）に基づき外傷性あり群（ $n=42$ ）と外傷性なし群（ $n=165$ ）に分類された。RDESを目的変数とした階層的重回帰分析の結果（Table 3），外傷性と被害的認知の頻度は，独立して解離へ

Table 3  
解離を目的変数とした階層的重回帰分析

	$\beta$		
	Step1	Step2	Step3
外傷性(あり=1)	.58 ***	.51 **	.54 ***
JPC(頻度)		.44 ***	.42 ***
JPC(確信度)		.04	.09
JPC(苦痛度)		-.05	-.07
外傷性×JPC(頻度)			-.01
外傷性×JPC(確信度)			-.23
外傷性×JPC(苦痛度)			.12
$R^2$	.05 ***	.22 ***	.22 ***
$\Delta R^2$		.17 ***	.00

注)  $R^2$ は自由度調整済み。\*\* $p < .01$ ; \*\*\* $p < .001$

影響することが明らかとなった (各々  $\beta=.51, p<.01$ ;  $\beta=.44, p<.001$ )。交互作用が認められなかった点から、外傷性の有無に関わらず、被害的認知の繰り返しが解離を引き起こすと考えられる。これは、非外傷性イベントによって生じる重篤な PTSD の背景には認知的要因が存在するという示唆 (伊藤・鈴木, 2009) と一致する。以上より、出来事がどのようなものであるか、という客観的観点と共に、当事者がその出来事をどのように体験しているのか、という主観的視点の重要性が推察される。

#### **第 4 章 解離を引き起こす出来事要因と解離体験者の心的世界の特徴**

##### **第 1 節 出来事の属性が解離に及ぼす影響 (研究 4)**

1. 目的 Brunner et al. (2000) が指摘しているように、外傷性の有無に関わらず、継続的にストレスに曝されること (以下、継続性) は、解離を引き起こすと考えられる。そこで継続性が解離に及ぼす影響を検討する。
2. 方法 (1) 対象者 大学生 388 名 (男性 108 名, 女性 280 名)。(2) 尺度 (a) RDES。(b) 外傷性の有無。研究 3 と同様。(c) 継続性。「その出来事は長期間続いたり、あるいは何度も同じことが繰り返し起きたりしましたか?」に対し、2 件法 (1.はい・0.いいえ) で回答を求めた。
3. 結果と考察 外傷性と継続性を独立変数、RDES を従属変数とした 2 要因分散分析により、外傷性と継続性の双方に有意な主効果が認められた (それぞれ  $p < .01, .02$ )、交互作用は有意でなかった (*n.s.*)。以上より、非外傷性イベントの継続や蓄積により解離が生じ得ることが推察された。

##### **第 2 節 解離体験者の心的世界の特徴に関する探索的検討 (研究 5)**

1. 目的 出来事および自己に対する認知が、解離とどのように関連するのか質的に検討する。
2. 方法 (1) 対象者 研究 4 において面接調査に同意した者の内、11 名 (男性 3 名, 女性 8 名)。(2) 調査内容 記入済みの質問紙を調査者と対象

者で参照しながら，以下の半構造化面接を実施した。最もストレスフルであると評価された出来事 (the Most Stressful Event; 以下 MSE) について，①状況，②解離が生じていたか，③出来事および自己に対する認知を詳細に尋ねた。(3) 分析手順 定性的コーディング (佐藤, 2008) の内，対象者の語りからボトムアップ式にカテゴリを生成する帰納的アプローチを参考に分析した。

**3. 結果と考察** 多くの対象者は外傷性のある出来事としてではなく，日常からの逸脱が大きな出来事，あるいは日常生活や進路選択など他の領域へ波及する出来事として MSE を捉えていた。また，MSE は自身の力ではどうしても出来ない出来事であったと考える一方で，その出来事が生じたのは自分の責任であると考え，このような特徴を持つ対象者の多くは多様な解離性体験を報告した。以上より①解離を引き起こすような出来事の属性は外傷性に限定されないこと，②原因帰属や統制感といった個人の認知が解離と関連することが推察される。

## 第 5 章 総合考察

### 第 1 節 本研究の成果

本研究の目的は，解離を引き起こす要因を出来事要因および個人要因の 2 側面から検討し，解離の生起要因を明らかにすることであった。研究 1 では，これまで解離の原因と目されてきた外傷性イベントだけでは，解離を説明するには不十分であることが示された。そして個人要因としては，自分を大切にしてもらっている感覚に乏しく (研究 2)，被害的な認知を繰り返すこと (研究 3)，出来事に対する統制感が乏しく自責的に考えること (研究 5) が解離と関連することが示された。また出来事要因としては，外傷性と継続性がそれぞれ独立して解離と関連することが示された (研究 4)。加えて，非外傷性イベントであっても日常からの逸脱

度が大きな出来事や波及性の高い出来事は解離と関連しやすいことが推察された (研究 5)。

研究 3, 4 の結果は外傷性の影響力の強さを裏付けるように見えるが、これらの結果は外傷性の影響を統制してもなお、他の要因が解離に影響を及ぼすことを示唆している。多くの先行研究は外傷モデルに基づき、外傷性イベントの影響の重大性が注目されてきた。本研究の結果も、外傷性イベントの影響を否定するものではない。しかし本研究では、外傷モデルでは説明が困難な非外傷性イベントによる解離の関連要因を検討することを通し、当事者の主観的評価も重視すべきであることを示した。本研究の知見からは、非外傷性イベントであっても出来事が継続性を伴うものであった場合や、個人の持つ認知特性によっては解離を引き起こすほどに侵襲性の高いものとなり得ることが推察される。従って、外傷性は飽くまで解離を引き起こす要因の 1 つに過ぎず、臨床心理学的に解離を理解するためには、他の要因にも十分な注意と配慮がなされるべきであろう。

## 第 2 節 本研究の限界および今後の課題

研究 1 については、英語バイアスの回避と文化差検討のために、英語以外の言語で記述された研究の追加が求められる。更に、文献検索条件をアブストラクトに **dissociation** と **trauma** が記載されたものまで拡大し、より多くの研究を対象とする必要がある。また研究 2 以降の対象者は、比較的健康的な大学生であった。そのため多くの対象者の解離性体験は、日常生活に支障のない水準のものであったと予想される。解離連続体仮説に基づけば、延長線上には解病的な解離が存在することが考えられるものの、得られた知見を臨床群へ応用するためには、大学生だけでなく多様な集団を対象として知見の再現性の確認が必要である。

非外傷性イベントによる重篤な精神症状の背景には認知的要因が存在する可能性が示唆されていること (伊藤・鈴木, 2009), 外傷性の影響を統制したとしても解離に影響を及ぼす要因が存在することが明らかになったこと (研究 3, 4), 原因帰属と統制感が解離的な体験と関連し得ることが推察されたこと (研究 5) を踏まえると, 外傷性イベントによって生じる解離 (以下, 外傷性の解離) と非外傷性イベントによって生じる解離 (以下, 非外傷性の解離) では, その生起メカニズムが異なる可能性がある。外傷モデルに従えば, 外傷性の解離は圧倒的かつ侵襲的な出来事によって生じると考えられ, その生起過程では出来事要因が重要な役割を担うと思われる。これに対して本研究によって明らかになったように, 非外傷性の解離の生起には個人要因も重要な役割を担うと考えられる。生起メカニズムが異なれば, 解離の病理性や質的特徴にも違いがある可能性があるが, これらについては別の形で検討する必要がある, 今後の課題としたい。

## 引用文献

American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: DSM-5*. New York: American Psychiatric Publishing.

(アメリカ精神医学会 高橋三郎・大野 裕・染矢俊幸・神庭重信・尾崎紀夫・三村將・村井俊哉 (訳) (2014). *DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル* 医学書院)

飛鳥井望 (1999). 臨床疾患の臨床評価——不安障害 外傷後ストレス障害 (PTSD) —— 臨床精神医学, 増刊号, 171-177.

Briere, J. (2006). Dissociative symptoms and trauma exposure: Specificity, affect dysregulation, and posttraumatic stress. *Journal of Nervous and*

*Mental Disease*, 194, 78-82.

Brunner, R., Parzer, P., Schuld, V., & Resch, F. (2000). Dissociative symptomatology and traumatogenic factors in adolescent psychiatric patients. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 188, 71-77.

Dalenberg, C. J., Brand, B. L., Gleaves, D. H., Dorahy, M. J., Loewenstein, R. J., Cardeña, E., Frewen, P. A., Carlson, E. B., & Spiegel, D. (2012). Evaluation of the evidence for the trauma and fantasy models of dissociation. *Psychological Bulletin*, 138, 550-588.

本間美紀 (2013). 解離傾向とイメージ現実感との関連性の検討 若手イメージ研究者のためのブラッシュアップセミナー予稿集, 24-29.

一丸藤太郎 (1998). 多重人格障害の研究と臨床——日本・アメリカでの解離性障害臨床像の特徴—— 松下正明・浅井昌弘・牛島定信・倉知正佳・小山 司・中根允文・三好功峰 (編) 臨床精神医学講座 第23巻 多文化間精神医学 (pp.213-229) 中山書店

伊藤大輔・鈴木伸一 (2009). 非致死性トラウマ体験後の認知尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 行動療法研究, 35, 155-166.

Janet, P. (1889). *L'automatisme psychologique: Essai de psychologie expérimentale sur les formes inférieures de l'activité humaine*. Paris: Alcan.

(ジャネ, P. 松本雅彦 (訳) (2013). 心理学的自動症——人間行動の低次の諸形式に関する実験心理学試論—— みすず書房)

van der Kolk, B.A., McFarlane, A. C., & Weisaeth, L. (1996). *Traumatic stress: The effects of overwhelming experience on mind, body, and society*. New York: Guilford Press.

(ヴァン・デア・コルク, B. A., マクファーレン, A. C., ウェイゼス, L.

- 西澤 哲 (監訳) (2001). *トラウマティック・ストレス——PTSD およびトラウマ反応の臨床と研究のすべて——* 誠信書房)
- 舩田亮太・中村俊哉 (2007). 近年の国内における解離性同一性障害の分類について——一時的ストレス型 DID の心理臨床的検討—— *心理臨床学研究*, 25, 476-482.
- Nemiah, J. C. (1998). Early concepts of trauma, dissociation, and unconscious: Their history and current implications. In J. D. Bremner & C. R. Marmar (Eds.), *Trauma, memory, and dissociation* (pp.1-26). Washington, DC: American Psychiatric Press.
- Nilsson, D., & Svedin, C. G. (2006). Dissociation among Swedish adolescents and the connection to trauma: An evaluation of the Swedish version of adolescent dissociative experience scale. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 194, 684-689.
- Putnam, F. W. (1989). Pierre Janet and modern views of dissociation. *Journal of Traumatic Stress*, 2, 413-429.
- 岡野憲一郎 (2002). 解離 小此木啓吾・北山 修・牛島定信・狩野力八郎・衣笠隆幸・藤山直樹・松木邦裕・妙木浩之 (編) *精神分析事典* (p.60) 岩崎学術出版社
- 岡野憲一郎 (2007a). *解離性障害——多重人格の理解と治療——* 岩崎学術出版社
- 岡野憲一郎 (2007b). わが国における解離性同一性障害——その成因についての一考察—— *トラウマティック・ストレス*, 5, 33-42.
- 奥山眞紀子 (2005). 虐待を受けた子どものトラウマと愛着 *トラウマティック・ストレス*, 3, 3-11.
- Ray, W. J., June, K., Turaj, K., & Lundy, R. (1992). Dissociative experiences

in a college age population: A factor analytic study of two dissociation scales. *Personality and Individual Differences*, 13, 417-424.

Ross, C. A., Keyes, B. B., Yan, H., Wang, Z., Zou, Z., Xu, Y., Chen, J., Zhang, H., & Xiao, Z. (2008). A cross-cultural test of the trauma model of dissociation. *Journal of Trauma & Dissociation*, 9, 35-49.

Sandberg, D. A. (2010). Adult attachment as a predictor of posttraumatic stress and dissociation. *Journal of Trauma & Dissociation*, 11, 293-307.

佐藤郁哉 (2008). 質的データ分析法——原理・方法・実践—— 新曜社

Spiegel, D. (1984). Multiple personality as a post-traumatic stress disorder. *Psychiatric Clinics of North America*, 7, 101-110.

杉山 崇 (2002). 抑うつにおける「被受容感」の効果とそのモデル化の研究 心理臨床学研究, 19, 589-597.

杉山 崇・坂本真士 (2006). 抑うつと対人関係要因の検討——被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつの自己認知過程の検討—— 健康心理学研究, 19, 1-10.

田辺 肇 (1994). 解離性体験と心的外傷体験との関連——日本版 DES (Dissociative Experience Scale) の構成概念妥当性の検討—— 催眠学研究, 39, 1-10.

山内貴史・須藤杏寿・丹野義彦 (2007). 日本語版 Paranoia Checklist の作成および信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 16, 114-116.

## 初 出

### 第 2 章第 1 節

#### 同 第 2 節

トラウマティック・ストレス第 13 巻 2 号に掲載の「メタ分析による解離と外傷体験における関連性の再検討——解離を引き起こしやすい外傷体験とは何か——」(pp.171-187) を元に、加筆修正のうえ執筆した。

### 第 3 章第 1 節

パーソナリティ研究第 24 巻 1 号に掲載の「比較的軽度なストレスサーと解離性体験の関連——ポジティブな対人認知の影響について——」(pp.91-93) を元に、加筆修正のうえ執筆した。

#### 同 第 2 節

パーソナリティ研究第 35 巻 2 号に掲載の「被害的な認知特性と出来事の外傷性が外傷後反応と解離性体験に及ぼす影響」(pp.166-170) を元に、加筆修正のうえ執筆した。